カンヌ映画祭　2024年　　サウス・チャイナ・モーニング・ポスト2024年5月23日

ジェイムス・モットラム

・賈樟柯　（ジャ・ジャンクー）がカンヌ映画祭に出品した新作は、2001年という時代とパンデミックを経験した不遇な時代との間の映像をブレンドした作品!
・賈樟柯　（ジャ・ジャンクー）、映画製作を始めてからの中国という国家の変容が、映画作りに及ぼした影響と彼の作品で主演を続ける女優であり妻である趙濤との関係を語る!

どこか古めかしく、どこか新しさを感じさせる賈樟柯の最新作「風流一代」（英語題「CAUGHT BY THE TIDES」は、今年のカンヌ映画祭に最も好奇心を集める作品の一本として登場した。中国人脚本家・映画監督、賈樟柯　については、言うまでもなく世界的にも経験豊かな映画作家としての評価を得ているが、前作「帰れない二人」(2018)　は、彼にとって五度目のカンヌ映画祭出品作品だった。ところが、賈樟柯　はかつてこのような作品をカンヌのクロワーゼット通りに持ち込んだことはなかった。

2001年に遡り、これまで何年にも渡って撮影されてきた映像は、中国のCOVID-19パンデミックに陥った人々を題材にした新たな物語と関連性を持ち、また2000年の「プラットホーム」以来常連女優として主演を務める妻でもある趙濤との共同作業の意味合いを強める結果となった。

本作での趙濤は、2002年の「青の稲妻」は不満を抱える若者たちを描く作品だったが、この続編として登場する。これは賈樟柯の行う典型的な手法と言える。ここでも趙濤は、中国北部の大同市に住むモデルの巧巧を演じるが、彼女のボーイフレンド郭寶（李天）はマネージャーをしている。郭寶が将来のことを考え台同市を後にし、巧巧が街に一人残されると、彼女は健気にも無駄と知りつつ彼のことを探そうとするが、とうとう何年か過ぎ彼女は様変わりして街に舞い戻っていくるという展開だ。

2001年に賈樟柯は、映画製作を始めたときに、映画には終着点はないと決めていた。今回、彼にカンヌでの多忙な日々の合間を縫ってインタヴューすると、彼は「当時の中国はこれから一体何が起きるのかと非常に興奮した状態にいました - - - - 本当に希望に満ちた状態で前向きで、混沌とした中でエネルギーを発散させたいと考えていました」と言う。そして、「気持ちとしては、これで最後の映画になってしまうといった悲惨な気持ちなんてまったくありませんでした。好きなだけ撮っていきたいと考えましたし、印象深く、あまり単純なものは避けたいと思って撮っていったのです。それがドキュメンタリー作品でも一般映画であっても」と続ける。

2001年から2006年の間の活動では、記憶に残る作品として「長江哀歌」(2006)　があるが、この作品でヴェネツィア映画祭で金獅子賞を獲得した。この作品は、三峡ダムの完成で住み慣れた長江流域の小さな町が水没してしまう運命にある住人たちを描いた作品だった。巨大な国家プロジェクトの遂行への愛国心と誇りが垣間見えるところのある作品であり、ある労働者は「祖国のために」と言うが、賈樟柯は中国の経済と政治の発展の背後に潜む「変容の感情的側面」だと常に口にしていた。

筆者が、過去に二十年の個人として経験したあらゆる変化についてどう感じるかと聞いてみると、彼は「風流一代」の製作にあたって書き始めたノートの中の「下降曲線」の図を思い浮かべて応えてくれた。

「いいですか、2001年の頃からの話をしましょう。その頃はWTO加盟やオリンピックの開催決定で、国中は喜びに沸き、私たちは将来の希望に夢を膨らませていきました。もっと自由で生活水準も向上すると考えて- - - - 二十一世紀はまさに期待と希望の新世紀でした」

まさに期待と希望に溢れた時代を迎えたのだが、次第に物事は変わっていき、殊にCOVID-19パンデミックが発生すると、賈樟柯にとっては完全に活動を止めざるを得ない状況となり、何年にも渡ってその状況が続くことになった。

「あらゆることが停止してしまい、先に進めなくなりました。交通遮断があり、人々は孤立化し、どこへも行けなくなりました。勿論、旅行もかないません。何をしようにもうまくいきません。
「実にこれまでとは際立った対比です。希望と期待に胸を膨らませていたのに - - - - 突如としてこうした環境に変化し、そして粛々と時間だけが過ぎてしまいます。そんな中で情熱も消え去ってしまいます」

この作品に見て取れるより時代性を表現した一つはテクノロジーによる侵犯ということではないだろうか。例えば、商品を提供するロボットが現れ、「誠に申し訳ありませんが、あなたの表情を読み取ることがきないのです」と不審な態度の巧巧に言うシーンがある。

「経済だけではありませんし、政治だけではありません。国家の景観を変えてしまった原因はテクノロジーにもあるのです。自動運転の車を目にするようになり話題にもなっています。ロボットの見かけるようになっています
「十年前だったら、人々は未来の出来事かファンタジーがSFの世界の話だと思っていたことでしょう」

パンデミック以降、こうしたテクノロジーはどこでもみることができるようになりました。賈樟柯は、「中国のホテルやレストランやオフィスでロボットを見ることができます。この変化は、私がこの作品で扱ってみたかったテーマでしたし、もう後ろを振り返ることなしに、もしくはテクノロジーがいかに発展したかということを歴史的な観点から見ることなしに、このテーマを扱うことはできなかったのです」と言う。

賈樟柯は、この先品の中で、茶房で居眠りする趙濤のシーンを引き合いに出し、彼女のいる場所の壁越しにはロボットを主体とするSF作品が潜んでいるとし、「彼女が実生活の中でロボットの出現に興味を示すと同時に、2022年の時点で特定のSFは現実のものへと変化するのです」と言う。

「風流一代」と言う作品は、五十三歳となった賈樟柯のこれまでのキャリアの総決算的な作品であり、また内省の機会を与えた作品でもある。

「私が、当時の中国で起こったことを記録したり、永続性のある形態で表現した今となっては過去のイメージというものがありました - - - - そうしたイメージで私がどんな映画監督であるか、どんな主観性を備えているのか、また私が当時の社会環境とどう関わってきたのか評価されたのです。
「そして、特にこの作品で、私が映画作家として、また私自身の進化の度合いを見てもらい、これまでの過去二十数年間の私のものの見方、精神的な変化と成長を再確認してほしいのです」

本作では、なにものにも増して、ずっと続いている趙濤とのコラボレーションを集大成する作品に思える。賈樟柯は、「彼女と一緒に仕事するときには、私が望んだ通りの女性の視点を明確に表現してくれるのです」と言う。

趙濤は賈樟柯に、彼女の演じる巧巧の家族背景といった設定をきちんと確認するという。

「彼女は、女性として独立心の強いキャラクターを演じます。この特別のキャラクターを説得力のある演技で、情勢の感性を表現できたことに感謝しています」と言う。

授賞式で「バービー」の監督のグレタ・ガーウィッグ（訳註　今回の審査委員長）から趙濤に賞が渡されることも予想されるが、それが実現したときには、彼女の性格すれば言葉少なに落ち着いた表情を見せるのではなかろうか。

賈樟柯はカンヌでの受賞経験がない訳ではなく、2013年には「罪の手ざわり」で最優秀脚本賞を獲得している。「風流一代」は、curiusかつcraftyであり、受賞につながるか神のみぞ知るといったところだ。例え、受賞にならないとしても、私たち誰もが影響を受ける、時の経過とそれに伴う変化という根深い感覚が残る作品として強い印象を与えることだろう。（訳註　「curiuus」には好奇心の強いという意味のほかに「変な」「物好きな」という意味があり、また「crafty」に至っては、「巧妙であるが同時に不誠実な行動を示す際に適す」とされています。敢えて訳さず原文通りとしました。これは本作を見てからの日本語の選択になります）

(5.27.2024)